

という。

次の日から、初めての担任、十二人の子どもの生活が始まった。一つの教室に四年生三人、五年生五人、六年生四人、複々式授業である。計算がわからない四年生に六年生が教えてやる。シンクロファクスを相手に一人黙々と問題を解く五年生。私自身も無我夢中であつた。

スキートの達人六年生のS君。かじかじの大手五年生のY君。コスモスの花をいつも届けてくれた四年生のMさん。こぶしの花の咲く木の下でみんなで歌つた「山の子のうた」。夜、教員住宅でソロバンをやつたこと等々。つい昨日のようで、私にとって一生忘れられない十二人との出会いであつた。もう一人忘れられないのが、S小学校で担任したH君である。H君は、情障障害児である。ほとんど教室にはいない。努めて話をするようにした。空き時間に必ず一緒に過ごし、ゲームをしたり、仕事の手伝いをさせたりした。ある日のこと、ちよつとしたことで女の子に暴力を振るい、しかも興奮し



て暴れている。教室の机をはじの方に片付けて空いたところで私はH君と本気で相撲を十分近くとつた。それ以後は、私の言うことをきくようになったし、友だちとも仲良くできるようなつてきた。

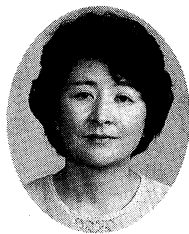
秋の終わりのある日。校庭から拾つてきた銀杏の実を一生懸命に水道で洗っている。そして、何日かたつた放課後、「先生くれる」と言つてコーヒーの空き瓶に2本持つてきてくれた。私は何と言つていいかわからず「ありがとう」と一言。

H君は、今電気部品を作る工場で働いている。ぎんなんを食べるたびに思

さようなら

へレン先生

高橋道子



「この記念にいただいたカメラで飯野と川俣の風景をたくさん撮つて、故郷へのよいお土産にします。」

送別会の席で、流暢な日本語であいさつするへレン先生のほつそりした白い横顔を見つめていると、爽やかな緑の風が、サーッと流れてくるような感じがします。外国旅行でお土産に高級ブランドを買いあさる日本人女性の話をチラッと思い浮かべたからです。へレン先生は北アイルランドの出身

い出している。

教師になつて本当によかつた。すばらしい多くの子どもたちと出会い、心の触れ合いが持てて幸福であつたと改めて感じるこの頃である。

今、生徒指導の在り方、重要性が問われている。その原点となるのは、先生と子どもとの心の触れ合いではないだろうか。どんなに忙しくても「先生あのね」と話しかけてきたら仕事の手を止めて話を聞いてあげる先生、又、「先生一緒に遊ぼう」と子どもに声をかけられる先生。そんな先生になれるようにさらに努力していきたい。

(福島市立矢野目小学校教諭)

と輝くものが見え始めてきたころでした。

はじめの頃、私が感じた一種のもどかしさは、彼女の前任者のAETのもつ雰囲気とは全く違つたものであつたからかもしれません。

へレン先生のもつ雰囲気はどことなく日本的で、つましやかな上品さが感じられました。日常の何気ない言動にも相手への思いやりの気持ちにじみ出ているのでした。私の同僚の女の先生は感心してよく話してくれたものです。

「バスから降りて一緒に話をしながら歩いてきても、学校の玄関近くに來ると、いつも歩調をゆるめ、自分は後に下がるの、私が年上なので、さりげなく道を譲るのだと思うの」と。

目上の相手をたてようとするこの自然な振る舞いは、私たちが随分昔に置き忘れてきたもののような気がします。彼女は私にもしばしば真剣な顔で相談してくれました。

自分はまだ日本語が完全でないために、他の先生方との会話の中で、気づかずに、失礼なことを言つてはいないだろうかと、ということでした。私はいつも彼女を激励し、逆に彼女の他人への配慮と、節度ある言動について褒めると、彼女はすかさず、「それは母のしついでしたから」と、さっぱりと答えるのでした。

時折、不作法な態度をとる子ども達に接している彼女にそう言われると、